

女子部

アメリカ式教育

(株) シンクフェーズ 辻田 眸

昨年（2015年）4歳になる娘が、アメリカで生まれ育った夫の希望でアメリカンスクールに入学しました。私自身は日本で生まれ育ち、ずっと日本の教育を受けてきたので、いろいろな違いがあり、興味深いです。

まず一番驚いたのが、プレゼンテーション・ディベートスキルを非常に大切に考えていることです。週に何回も「Show and Tell」の時間があります。「Show and Tell」は自分が作ったものや、見せたいもの、気に入っているものを見せながら皆の前で発表し、説明するプレゼンテーションの訓練のためのものです。娘のスクールではテーマが決まっているときもあり、たとえば「秋」や「家族」など、テーマに沿ったものを各々持ってきて、皆の前でプレゼンすることもあります。「Show and Tell」を繰り返すうちに、娘は何か自分が気に入ったものがあると、皆に教えてあげたい、シェアしたいといって、自らすすんでプレゼンテーションをするようになりました。3,4歳のころから人前で話す練習をし、プレゼンテーションをする力・議論する力を養っているのです。

博士号取得後アメリカのジョージア工科大学へ客員研究員として1年間滞在していたことがあるのですが、そのときにも学生たちのプレゼンテーション力・議論する力の高さに驚いたのを今でも覚えています。こんなに小さいころから人前で話す練習、議論する練習をしているのなら、納得です。

小学校や中学校のころ、目立ったり、自分の考えを主張することがあまり良いとされなかった環境にいた私にとって、根本的に違うのだと考えさせられました。

もう1つはクリエイティビティを重要と考えていることです。カリキュラム説明のときに、先生たちの口から、「デザイン・シンキング」という言葉が出てきたときはとても驚きました。アメリカのデザインコンサルタント会社IDEOが提唱しているアプローチとして知られていますが、先生たちがこの考えを日々の活動に取り入れようとしている話を聞き、創造性をはぐくむことをとても大切にしていることがよく分かったのです。学校では絵を描いたり工作したりする時間のほかに料理をする時間もあります。一方で読み書きや算数などの勉強の時間はほとんどなく、日本の幼稚園のほうが進んでいると聞くこともあり、何を大切に考えているのかが違うことがよく分かります。

もう1つはプログラミング教育や情報教育に積極的であるということです。アメリカではObama大統領もプログラミング教育の推進をする非営利団体「Code.org」の活動に賛同し、プログラミング教育の必要性について語る動画を公開したりしています。以前のコラムでも述べたように、アメリカでは子供向けのプログラミング言語やロボットが多くあり、それらを学校でも活用して授業に取り入れています。簡単なプログラムで動くロボットが学校に置いてあったり、iPadを利用した授業もあり、プログラミングを身近に感じる機会が多いようです。幼少期にプログラミングは必要か？

という議論もあるのですが、私自身はプログラミングが苦手で随分苦労したので、娘には幼いころからプログラミングを身近に感じてもらい、好きになってもらいたいと思っています。